広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第60号　2011　55－62

# オルタナティブな進路としての通信制高校

## ― 入学者の属性と意識 ―

尾　場　友　和

（2011年10月６日受理）

# Correspondence Senior High School as an Alternative Course

## ― Fresh students' attribution and consciousness ―

Tomokazu Oba

**Abstract:** The aim of this report is to reveal the feature of senior high school students in correspondence education. In Japan, 98% students after compulsory education enter senior high school. 5.3% of them are correspondence school students. Most of them has their experience of stopping going to junior high school and/or drop-out from a full-time senior high school. In about 10 years, this proportion is increasing. This is why there is few public organization for senior high school years students different from for compulsory school's students. This report includes the research of a private correspondence school in Kansai district. The school is considered as a typical correspondence school because this school was established in 1990's and mainly teenagers are accepted. This report says the analysis of the students who entered in April, 2006. The contents are how their attribution, their motivation for correspondence school, their view of study and their way of choosing elective subjects are. This research will be useful for understanding the actual students' conditions after their experience of stopping going to junior high school and/or drop-out from a full-time senior high school.

Key words: correspondence education, senior high school, stop going to school, drop-out
キーワード：通信教育，高校，不登校，中途退学

## 1　はじめに

本研究は，日本の高校としてマイノリティーに位置する通信制高校に焦点をあて，全日制ではなくオルタナティブな進路を選択した高校生の実態から今日的な通信制高校について検討するものである。

通信制高校は，1961年の学校教育法一部改正により全日制，定時制につぐ第３番目の課程として誕生した。高度経済成長期の真っただ中にあった当時，通信制高校には，「金の卵」と呼ばれる中学卒の集団就職者が多く在籍し，勤労青年のための学校として機能していた（手島　2002, pp.117-120)[1)]。だが高校進学率が上昇し各地で新設校が誕生した結果，中学卒就職者は激減した。それにともない高校生の質的変化が顕著となり，全日制高校を中退した生徒や不登校を経験した生徒が通信制を進路として選択するようになった。今日においてもそうした傾向には変わりがなく，通信制高校は全日制高校に対するオルタナティブな進路としての様相をなしていている[2)]。

こうした状況は，近年の通信制高校の学校数や生徒数の変化からその活況ぶりを読み取ることができる。平成22年度の学校基本調査によると，全国に4,964校ある高校のうち通信制高校（併置校含む）の割合は199校と全体の4.0％しかない。また生徒数においても3,362,689人のうち，通信制課程在籍者は179,884人と全体の5.3％にすぎない。しかし９年前の調査と比較

**表１　通信制高校の学校数・生徒数の変化**

| 平成 13 年 | 全日制 | 定時制 | 定時制併置校 | 通信制 | 通信制併置校 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 学校数 | 4,622(82.5) | 184(3.3) | 673（12.0） | 26(0.5) | 93（1.7） | 5,598 |
| うち私立高校 | 1,269 | 12 | 37 | 20 | 29 | 1,367 |
| 私立占有率 | 27.5 | 5.7 | | 41.2 | | 26.9 |
| 生徒数 | 3,942,227(92.9) | 111,400(2.6) | | 190,132(4.6) | | 4,243,759 |
| うち私立高校 | 1,178,318 | 4,832 | | 80,446 | | 1,263,596 |
| 私立占有率 | 29.9 | 4.3 | | 42.3 | | 29.8 |
| 平成 22 年 | 全日制 | 定時制 | 定時制併置校 | 通信制 | 通信制併置校 | 合計 |
| 学校数 | 4,115（82.9） | 162(3.3) | 488（9.8） | 88(1.8) | 111(2.2) | 4,964 |
| うち私立高校 | 1,239 | 5 | 26 | 81 | 49 | 1,400 |
| 私立占有率 | 30.1 | 3.1 | 5.3 | 92.0 | 44.1 | 28.2 |
| 生徒数 | 3,071,220(91.3) | 111,625(3.3) | | 179,844(5.3) | | 3,362,689 |
| うち私立高校 | 962,849 | 3,123 | | 101,133 | | 1,067,105 |
| 私立占有率 | 31.4 | 2.8 | | 56.2 | | 31.7 |

注；（　）は％

すると，全日制高校では少子化や統廃合により学校数が減少しているなか，通信制高校は学校数で119校からおよそ1.7倍の199校に増加している。また生徒数においても，全体で20.8％減少しているにもかかわらず，通信制高校では5.4％しか減少していない。

こうした通信制高校の相対的な拡大を背景に，通信制高校を選択し入学する生徒は，従来入学していた生徒層とは大きく異なっている。そのため，通信制高校には後述するような学修システムに基づいて教育活動が進められるものの，中途退学する生徒も少なくなく，学校や教師による支援が強いられている。

そこで，本稿は通信制高校に入学する生徒の実態を明らかにし，そこでみた課題から通信制高校を研究する意義について検討する。また，オルタナティブな進路としての通信制高校が抱える今後の課題について論じたい。

## ２　通信制高校研究の意義

通信制高校には，中途退学や不登校を経験した生徒が数多くいる。だが，こうした学校適応に問題を抱えた生徒を受け入れ可能とする公的な学校は非常に少ない。森田（2003，p.18）によれば，中学校年齢段階の不登校は公私さまざまな支援体制が整備されているが，高校年齢段階になるとつまずきへの支援体制が極端に脆弱になってしまうという。そうした意味で通信制高校は貴重な存在で，支援の隙間を埋める位置にある。

だがこれまでの通信制高校研究の多くは，全日制とは異なる多様な生徒がいることによって生じる課題に焦点をあてている。たとえば上田（2009a, 2009b）は，通信制高校が生涯教育の側面も担っていることから中高年や子育て中の生徒を対象とした調査を行っている。だが，通信制高校に通う特徴的な生徒に照射されるがあまり，中途退学や不登校を経験した生徒の支援といった高校年齢段階のオーソドックスな生徒像を映し出すという点では十分でない。また，遠藤（2002），東村（2004）は通信制高校生の学習を支援するサポート校に焦点をあて，そこでの教育的機能・学校文化の検討から今日の学校教育の在り方を問うた。その中で，サポート校急増の背景に，「通信制高校だけでは，こうしたタイプの生徒に着実に単位を取得させ，卒業させることが難しく，生徒のニーズに十分応えることができない」（東村2004, p.152）としたが，ならばなぜ通信制高校だけでは不十分なのか実証的な解明はなされておらず，通信制高校の教育的機能について明らかにする必要がある。

したがって，本研究のような通信制高校に通う生徒の実態を明らかにすることは，高校年齢段階での学校

**表２　通信制高校Ｘ校入学者の属性（%）**

| 性別 | 男子 | 女子 | 合計 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 55.1 | 44.9 | 100.0(185) | | | |
| 入学者の年齢 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19以上 | 合計 |
| | 19.0 | 28.3 | 38.0 | 7.1 | 7.6 | 100.0(184) |
| 入学形態 | 新入学 | 転入学 | 編入学 | 合計 | | |
| | 21.2 | 59.8 | 19.0 | 100.0(184) | | |

注;（　）は人数

不適応に対する支援機関として，通信制高校の可能性を検証することができる。また，実態を認識することで高校年齢段階での教育のありように重要な示唆を与えることができるのではないか。

## ３　研究方法

### （１）　調査方法・対象

調査は，関西地域の都市部に位置する私立通信制・単位制高校（Ｘ校）を対象に行った。Ｘ校は2000年代初めに開校し，同じ経営組織には専門学校なども有する中規模の通信制高校である。卒業後は，大学短大へ４割，専門学校へ３割，就職が１割で２割が不明となっている。

本調査では，2006年４月に入学した生徒197名を対象に履修登録時に担当教員を通じて調査用紙を配布し，185名からの回答を得た（表２）。調査対象者の属性は，男子が55.1%，女子が44.9%と男性の方がやや多くなっている。また入学時の年齢では，17歳が最も多く38.0%，続いて16歳が28.3%，15歳が19.0%となっており，高校学齢期の生徒がほとんどであった。また19歳以上の生徒は7.6%と１割にも満たしておらず，最高年齢が26歳であることから，入学生は10代20代の生徒だけになっていた。入学形態でみると，新入学の生徒は21.2%である一方，転入学（前籍校から空白期間を経ず転入）の生徒が59.8%，編入学（前籍校を退学し空白期間を経て転入）の生徒が19.0%と両方で78.8%に達しており，入学形態の多様性が調査校の特徴であるといえよう。

### （２）　通信制高校の学習システム

通信制高校の学習システムは，高校生活と学校外での活動との両立を可能にした履修方法に大きな特徴がある（表３）。

まず第１に，学校に登校して教員から指導を受ける時間が全日制・定時制高校と比べて非常に少ないことがあげられる。たとえば全日制高校では，１単位あたり週35時間分の授業を通して単位が認定されることになっているが，高等学校学習指導要領「第８款 通信制の課程における教育課程の特例」により通信制ではスクーリングとよばれる面談指導があり，教科の特性にもよるが１単位あたり１～４時間の指導を受けさえすればよい。しかも多くの学校は，登校日を選べるようになっている。したがって，月に１～２回の登校から週に５日登校することも可能であり，学校中心とした生活を強いられない。

第２に，教科書やスクーリングで学習した成果をレポートとして作成し，教員による添削指導を受けるという点である。レポートの回数は，科目・単位数によって異なるが，１科目につき概ね６～12回ほど提出し指導を受けることになる。

以上の学習を通じて，最後に単位認定試験に受験し合格することで単位が認定される。ほかには卒業要件として30時間以上の特別活動に参加することが求めら

**表３　通信制高校の学習システム**

| 各教科・科目 | 添削指導（回） | 面接指導（時間） |
|---|---|---|
| 国語，地理歴史，公民及び数学に属する科目 | 3 | 1 |
| 理科に属する科目 | 3 | 4 |
| 保健体育に属する科目のうち「体育」 | 1 | 5 |
| 保健体育に属する科目のうち「保健」 | 3 | 1 |
| 芸術及び外国語に属する科目 | 3 | 4 |
| 家庭及び情報に属する科目並びに専門教育に関する各教科・科目 | 各教科・科目の必要に応じて２～３ | 各教科・科目の必要に応じて２～８ |

注；文部科学省（1999）より作成。

れている。

このように，通信制での学習は自分のペースで学べるという利点があり，なかなか通学する時間がとれない芸能人やスポーツ選手などが入学するケースがある。

## 4　分　析

### （1）　入学までの生徒の経歴

まずは入学生の中３時の学業成績を見てみることにしよう（表４）。中３時の成績では，「下位」が38.5％と最も多く，次に「中の下」が27.9％と続き，両方の合算で66.4％が学力下位層となっている。だが，「中位」23.5％，「中の上」9.5％，「上位」0.6％と「中位」以上が33.6％もおり，学力は下位層に偏りながらもなだらかな広がりを見せている。一般的に高校は学力階層による序列関係にあるとされるが，このことから通信制高校は一般校とは異なる社会的文脈に位置づいているといえるだろう。

次に中３時の登校状況について見ていこう（表５）。「ほぼ毎日通っていた」が46.1％と最も多く，ついで「月１回位欠席」が14.0％となっていた。だが「ほとんど休んだ」17.4％，「週１回位休んだ」11.8％，「週の半分位休んだ」10.7％とこれら３項目で39.9％に達しており，１年間の標準授業時間数から算出してみると，これらの生徒は年間30日以上欠席した深刻な不登校状態にあった生徒だといえる。

さらに入学時の就労状況を見てみよう（表６）。これによると「仕事をしていない」が54.9％，「仕事をしている」が45.1％となっており，入学以前からおよそ半分の生徒が入学以前よりアルバイトなどの職業生活を経験していたことになる。

では，新入生と転編入生と比較してそれぞれの項目に違いはあるのだろうか。「中３時の成績」を「上位」（５）から「下位」（１）で算出した平均値で比較すると，新入生が1.41，転編入生が2.24成績となっており，転編入生の方が中３時代の成績は良い。「中３時の登校状況」では，転編入生の54.3％が「ほぼ毎日通っていた」と回答しているのに対し，新入生では51.3％がほとんど休んだと答え，新入生のほうが不登校を経験していた傾向が強い。このように新入生の中学３年時の学校生活は，不登校でしかも成績が芳しくない非常に窮地に追い込まれた生徒であったといえるのではないだろうか。最後に，「入学時の就労状況」では，転編入生の49.7％がなんらかの「仕事をしている」と応えているのに対し新入生の71.8％が「仕事をしていない」と回答している。入学時点では，転入生のほうが新入生より学校外での人間関係を構築しやすい環境にあり，交友の広がりを示していると考えられる。

### （2）　入学理由

生徒はどういった理由で通信制高校を選択し入学するのか（表７）。「よくあてはまる」「ややあてはまる」の合算でみると，「自分のしたいことしながら高校に通えるから」が67.2％と最も高く，「この学校や先生の雰囲気がよかったから」が66.6％，「厳しい校則がなく自由だから」が54.2％となっており，通信制の学

**表４　通信制高校Ｘ校入学生の中学３年時の学業成績の自己評価（％）**

| 上　位 | 中の上 | 中　位 | 中の下 | 下　位 | 合計 | 新入生 | 転編入生 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 0.6 | 9.5 | 23.5 | 27.9 | 38.5 | 100.0(179) | 1.41 | 2.24 | ** |

注；（　）は人数。網掛部分の数値は「上位」（５）から「下位」（１）によって算出した平均値の比較を行ったもの。** は P＜0.001。

**表５　通信制高校Ｘ校入学生の中学３年時の登校状況（％）**

| | ほぼ毎日通っていた | 月１回位欠席 | 週１回位欠席 | 週の半分位欠席 | ほとんど休んだ | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 新 入 生 | 18.0 | 2.6 | 15.4 | 12.8 | 51.3 | 100.0( 39) |
| 転編入生 | 54.3 | 17.4 | 10.9 | 10.1 | 7.2 | 100.0(138) |
| 全　　体 | 46.3 | 14.1 | 11.9 | 10.7 | 16.9 | 100.0(177) |

注；（　）は人数。P＜0.001。

**表６　通信制高校Ｘ校入学時における就労状況（％）**

| | 仕事をしていない | 仕事をしている | 合計 |
|---|---|---|---|
| 新 入 生 | 71.8 | 28.2 | 100.0( 39) |
| 転編入生 | 50.3 | 49.7 | 100.0(145) |
| 全　　体 | 54.9 | 45.1 | 100.0(184) |

注；（　）は人数。P＜0.05。なお「仕事をしている」には正社員（契約社員）・アルバイト・家事手伝い・自営業も含む

**表７　通信制高校Ｘ校への入学理由（%）**

| | よくあてはまる | ややあてはまる | あまりあてはまらない | 全くあてはまらない | 合計 | 新入生 | 転編入生 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 高校を卒業しておかないと、将来不安だから | 53.8 | 35.2 | 7.7 | 3.3 | 100.0 (182) | 3.28 | 3.43 | |
| 高卒資格がないと自分のやりたいこと大学や専門学校進学、就職などができないから | 54.4 | 27.5 | 12.6 | 5.5 | 100.0 (182) | 3.15 | 3.35 | |
| 「高卒資格」が必要な場面に実際にであったから | 19.3 | 14.4 | 29.3 | 37.0 | 100.0 (181) | 1.74 | 2.26 | * |
| 仕事先やアルバイト先の先輩や同僚にすすめられたから | 6.1 | 12.7 | 19.3 | 61.9 | 100.0 (181) | 1.26 | 1.73 | ** |
| 自分のしたいことしながら高校に通えるから | 37.8 | 29.4 | 18.3 | 14.4 | 100.0 (180) | 2.92 | 2.91 | |
| 先生との人間関係が面倒でなさそうだから | 7.9 | 27.1 | 44.1 | 20.9 | 100.0 (177) | 2.27 | 2.21 | |
| 友達との人間関係が面倒でなさそうだから | 9.5 | 24.6 | 41.9 | 24.0 | 100.0 (179) | 2.23 | 2.19 | |
| 高校の勉強がしたかったから | 13.8 | 21.5 | 35.9 | 28.7 | 100.0 (181) | 2.38 | 2.16 | |
| 他に行く高校がなかったから | 7.8 | 20.6 | 36.1 | 35.6 | 100.0 (180) | 2.72 | 1.81 | ** |
| 入試がやさしいから | 9.9 | 17.1 | 33.1 | 39.8 | 100.0 (181) | 2.38 | 1.86 | * |
| 年度の途中でも入学できるから | 8.5 | 24.4 | 27.8 | 39.2 | 100.0 (176) | 1.47 | 2.16 | ** |
| 先生のすすめ | 14.4 | 14.9 | 24.9 | 45.9 | 100.0 (181) | 2.05 | 1.94 | |
| 友人のすすめ | 12.8 | 16.1 | 16.7 | 54.4 | 100.0 (180) | 1.68 | 1.92 | |
| 親や家族、親戚のすすめ | 21.9 | 25.3 | 18.5 | 34.3 | 100.0 (178) | 2.32 | 2.34 | |
| 厳しい校則がなく自由だから | 24.6 | 29.6 | 30.7 | 15.1 | 100.0 (179) | 2.66 | 2.64 | |
| 学校行事が少なそうだから | 7.9 | 24.3 | 42.4 | 25.4 | 100.0 (177) | 2.24 | 2.12 | |
| この学校や先生の雰囲気がよかったから | 21.8 | 44.8 | 24.7 | 8.6 | 100.0 (174) | 2.97 | 2.75 | |

注；（　）は人数。網掛部分の数値は「よくあてはまる」（４）から「まったくあてはまらない」（１）によって算出した平均値の比較を行ったもの。
*は P ＜0.01, **は P ＜0.001を示す。

校生活や校風に魅かれて入学を決めている。

では，新入生と転編入生とでは入学理由に違いはあるだろうか。「よくあてはまる」（４）から「まったくあてはまらない」（１）によって算出した平均値で比較してみた。すると，転編入生の方が実社会からの影響を強く意識していることを窺うことができる。たとえば，「「高卒資格」が必要な場面に実際にであったから」では，新入生が1.74であるのに対し，転編入生は2.26

という値になっており0.52ポイントの差があり，「仕事先やアルバイト先の先輩や同僚にすすめられたから」では，新入生が1.26であるのに対し転編入生は1.73という数値から0.47ポイントの差があるなど，転編入生の高卒資格に強いこだわりが見られた。

また「他に行く高校がなかったから」では，転編入生が1.81であるのに対し，新入生は2.72という値で0.91ポイントの差があり，「入試がやさしいから」でも転編入生が1.86であるのに対し，新入生は2.38で0.52ポイントの差があった。このように，新入生のほうが他に行く高校がなく入りやすかったという理由で通信制を志している。

一方，転編入生では新入生よりも入学時期の柔軟さに魅かれて入学している。「年度の途中でも入学できるから」では転編入生が2.16であるのに対し新入生は1.47という数値になっており，0.69ポイントの差があった。

このように新入生と転編入生では，新入生では入試のやさしさに，転編入生では高卒資格の必要性と入試制度の適合性に惹かれて入学している。だがいずれにおいても，全日制高校の網にかからない理由で入学しており，高校段階での教育支援機関としての機能を通信制高校がいくらか担っていることが確認できた。

### （3） 学習観

入学後，彼らはどのように学習を進めていこうと考えているのか。彼らの学習観をとおして見ていきたい。まずは「よくあてはまる」「ややあてはまる」の合算で見てみると，「勉強よりも，自分の長所を伸ばしたい」が78.9％と最も高く，「勉強は将来役に立つ」が65.5％と次に高くなっている。彼らは勉強の有用性を認める一方で，自分の長所といった個性重視の志向が併存するアンビバレントな状況にある。だがこの有用性は，将来の立身出世的な意味で用いられていない。「人よりいい成績をとりたいと思う」で肯定的な回答は39.2％で，「よく勉強した人のほうが，幸せな人生を送れる」でも37.0％と低い数値となっている。

では，新入生と転編入生との比較で違いはあるだろうか。「よくあてはまる」（4）から「まったくあてはまらない」（1）によって算出した平均値で比べてみると，「勉強はおもしろい」では新入生が2.21であるのに対し，転編入生は1.83と0.38ポイントの差があり，新入生のほうが勉強に対して好意的に捉えている。また「勉強は将来に役立つ」と感じている割合も，新入生が3.08，転編入生が2.63と0.45ポイントの差がみられた。このことは，新入生が不登校での期間が長いため比較的難易度のやさしい段階での学習経験で留まっている可能性や，逆に転編入生は進学した高校で高度な学習についていけず単位不認定を経験し学習への嫌悪感があるのではないかといったさまざまな要因が考えられる。

学習に対する意味付けは，全体として決して高いとは言い難い。そうした状況の背景には，新入生・転編入生による違いにもあったようにこれまでの生活体験や学習経験から影響を受ける部分も少なくないのではないだろうか。

### （4） 科目選択の基準

では，実際の彼らの学習行動はどういったものであるのか。履修する科目の選択基準から彼らの学習意識に追ってみた。「とても重視した」「まあ重視した」の合算でみると，「興味や関心のある分野の科目」が60.3％と最も高く，次いで「自分の得意分野の科目」が51.1％で，この２項目のみが過半数を超えていた。このように入学時では，将来の進路を見据えた科目を

**表８　通信制高校Ｘ校入学生の学習観（％）**

| | よくあてはまる | ややあてはまる | あまりあてはまらない | 全くあてはまらない | 合計 | 新入生 | 転編入生 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 勉強はおもしろい | 1.6 | 19.6 | 46.7 | 32.1 | 100.0(184) | 2.21 | 1.83 | ** |
| 勉強は将来役に立つ | 16.9 | 48.6 | 24.0 | 10.4 | 100.0(183) | 3.08 | 2.63 | ** |
| 人よりいい成績をとりたいと思う | 11.0 | 28.2 | 44.8 | 16.0 | 100.0(181) | 2.13 | 2.41 | |
| 勉強よりも、自分の長所を伸ばしたい | 36.1 | 42.8 | 17.2 | 3.9 | 100.0(180) | 2.92 | 3.16 | |
| よく勉強した人のほうが、幸せな人生を送れる | 8.2 | 28.8 | 34.2 | 28.8 | 100.0(184) | 2.21 | 2.15 | |

注；（　）は人数。網掛部分の数値は「よくあてはまる」（4）から「まったくあてはまらない」（1）によって算出した平均値の比較を行ったもの。** は P ＜0.001。

**表９　科目選択の基準（%）**

| | とても重視した | まあ重視した | あまり重視しなかった | 全く重視しなかった | 合計 | 新入生 | 中退者 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 受験勉強に役にたつような科目 | 10.7 | 25.8 | 43.3 | 20.2 | 100(178) | 2.08 | 2.33 |
| 資格をとるのに役にたつような科目 | 9.1 | 30.1 | 39.8 | 21 | 100(176) | 2.1 | 2.33 |
| 自分たちの考えを発表したり、意見を言いあうような科目 | 3.4 | 10.2 | 50.6 | 35.8 | 100(176) | 1.76 | 1.83 |
| 体育や家庭科、芸術のような実技を中心とした科目 | 6 3 | 14.8 | 51.1 | 27.8 | 100(176) | 1.79 | 2.06 |
| 就職や社会にでてから役に立つような科目 | 9.6 | 28.2 | 45.8 | 16.4 | 100(177) | 2.31 | 2.32 |
| 自分の生き方に役に立つような科目 | 14.6 | 34.8 | 37.1 | 13.5 | 100(178) | 2.49 | 2.51 |
| 興味や関心のある分野の科目 | 22.2 | 38.1 | 31.3 | 8.5 | 100(176) | 2.62 | 2.76 |
| 実際の仕事や社会にふれる機会のある科目 | 8.4 | 21.3 | 51.1 | 19.1 | 100(178) | 2.05 | 2.24 |
| 単位取得がやさしい科目 | 8.4 | 28.7 | 48.3 | 14.6 | 100(178) | 2.36 | 2.3 |
| 系列やモデルプランにある科目 | 4.5 | 11.9 | 54.8 | 28.8 | 100(178) | 2.05 | 1.89 |
| 自分の得意分野の科目 | 17.4 | 33.7 | 35.4 | 13.5 | 100(178) | 2.46 | 2.57 |

＊（　）は人数。網掛部分の数値は「よくあてはまる」（4）から「まったくあてはまらない」（1）によって算出した平均均値の比較を行ったもの。

選択するというよりはむしろ，「自分ができること」を最優先に行動している。３番目以降では「自分の生き方に役に立つような科目」が49.4%，「資格をとるのに役にたつような科目」が39.2%，「就職や社会にでてから役に立つような科目」が37.8%となり，功利主義的な選択が続いた。

彼らの選択行動で，新入生と転編入生とでは違いはあるのか。「とても重視した」（４）から「全く重視していない」（１）によって算出した平均値で比較してみた。だが，科目の選択行動においては両者に大きな違いはみられず，他の質問とは異なりこれまでの学習経験や生活体験が反映されていなかった。

このように科目の選択基準をみてきたが，いずれの項目においても前向きな意識によって選択している割合は少ない。なぜ入学して間もないにもかかわらず，学校生活の中心をなす授業について関心が薄いのか，今後の検討課題である。

## まとめ

これまで通信制高校に入学する生徒が，どういった特質をもっているのか調査結果に基づき概観してきた。ここで浮かび上がったのが，セーフティーネットとしての通信制高校の機能である。

入学生のうち，39.9%が文部科学省の基準でいう不登校の生徒だった。森田ら（2002）調査でも，中学校時代不登校だった生徒のうち65%しか高校に進学せず，そのうち５年以内で卒業にいたった生徒は58%にすぎないという。すなわち，通信制高校はそうした不登校が抱える厳しい現実的な課題を引き受けており，そうした課題を解消させる大きな期待を担っている。さらに，通信制高校は他校からの転編入生の割合が78.8%を占め，うち転入生が59.8%に達している。文部科学省（2010）調査では，高校中退率は1.7%となっているが，それには統計上，転入生は中退には含まれないため，見かけよりも数倍の生徒が学校をやめ通信制高校に転入しているのではないか。このように通信制高校は，まさに中学校卒業後の進路として主流である全日制高校とは異なるオルタナティブな進路として位置づいているといえるだろう。

そうした通信制高校の置かれた状況において，通信制高校に通う生徒の特徴は，次の３点に要約できるだろう。第一に，一般的に高校は輪切りされているとするが，通信制高校の入学生は，学力，入学経緯，職業の有無では多様に富んでいる。だが，不登校・中途退学など負の学校経験をしているという共通な点も見受けられた。第二に，生徒は通信制高校を単に受け皿校的な側面で学校を選択しているのではなく，学校の校則や校風にも着目して入学している。とはいうものの，制度的（入学試験や入学時期）な仕組みが転編入生の

入学に大きな影響を与えている。第三に，生徒は勉強を決して否定的に捉えていない。実際，勉強のおもしろさや将来への有用性について認識している。だが，実際の授業選択においては，そうした意識があるのとは裏腹に，何か志向性を持って選択を行っているとは言い難く，なぜ彼らの意識が科目の選択につながらないのか課題を残す結果となっていた。

通信制高校は，ここ10年ほどで急速に数を増やし認知度を高めた。卒業生も少なからず輩出している。ここにきて，不登校や中退といった課題に対して，通信制高校がどのように立ち向かったか検証する時期にきている。本稿は入学時の一時点での分析にとどまっており，入学生の実態はつかめたが，入学後の学校生活によってどのような変容があるのか，いわば学校効果については分析対象に入っていない。そういった意味で，通信制高校の教育が生徒にどのようなインパクトを与えているいのかについては，今後の課題としたい。

## 【註】

1）実際，主として企業の男子従業員は科学技術学園工業高校で，主として紡績関係の女子従業員は大阪繊維工業高校で通信教育を受けた。

2）学校案内誌『通信制高校があるじゃん！〈2011～2012年版〉』のタイトルにあるように，全日制高校に代わる進路として通信制高校が紹介されている。

## 【参考文献】


遠藤宏美，2002，「「サポート校」における学校文化：「学校文化」なるものの特性解明の前提として」『教育学研究集録』（26），pp.25-35.

秦政春，1981，「高校中退者の発生要因に関する分析」『福岡教育大学紀要』第31号，第４分冊，pp.61-94.

東村知子，2004，「サポート校における不登校生・高校中退者への支援－その意義と矛盾」『実験社会心理学研究』43（2），pp.140-154.

石垣智博，2002，『通信制高校の現状と今後の方向性』平成13年度静岡県教育委員会大学等研究機関派遣事業研修報告書.

門脇厚司・飯田浩之編著，1992，『高等学校の社会史－新制高校の〈予期せぬ帰結〉』東信堂.

金子照基・榊原禎宏・植田義幸，1991，「高校中退生徒の在学中の意識構造の特徴と予防的指導法の開発研究」『マツダ財団研究報告書』vol.4，pp.35-51.

菊池英治・永田佳之，2001，「オルタナティブな学び舎の社会学」『教育社会学研究』第68集，pp.65-84.

小林剛，1987，『高校中退－克服のためのカルテ－』有斐閣新書.

小林剛，1996，『子ども支援の臨床教育学』萌文社.

古賀正義，2001，『〈教えること〉のエスノグラフィー：「教育困難校」の構築課程』金子書房.

学びリンク編集部，2011，『通信制高校があるじゃん！〈2011-2012年版〉』学びリンク.

文部科学省，2010，『平成21年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について』.

文部省，1999，『高等学校学習指導要領解説　総則編』東山書房.

森田洋司，2003，「「不登校追跡調査」から見えてきたもの」森田洋司編『不登校－その後－不登校経験者が語る心理と行動の軌跡』教育開発研究所，pp.1-50.

那須光章，1991，「高校中途退学者の中退要因と学習生活の実態に関する研究」『滋賀大学教育学部紀要人文科学・社会科学・教育科学』41，pp.87-106.

大阪府教育委員会，1991，『府立高等学校退学者実態調査報告書』.

酒井朗，1994，「1970～80年代高校生文化の歴史位相」『アカデミア人文・社会科学編』59，pp.225-254.

武内清，1993，「生徒文化の社会学」木原孝博・武藤孝典・熊谷一乗・藤田英典編著『学校文化の社会学』福村出版，pp.107-122.

手島純，2002，『これが通信制高校だ』北斗出版.

上野昌之，2009a，「通信制高校における生徒指導に関する考察」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊16（2），pp.25-36.

上野昌之，2009b，「通信制高校における中高年学習者の学びについての考察：都立Ａ高校における事例を中心に」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』9，pp.245-256.

梅田武男，2001，「〈中等教育現場からの研究ノート〉兵庫県における定時制通信制高校の現状と課題について」『教職教育研究』第６号，pp.65-69.

米川英樹，1978，「高校における生徒下位文化の諸類型」『大阪大学人間科学部紀要』第４巻，pp.183-208.

全国高等学校通信制教育研究会編著，1998，『高等学校通信制教育五十年のあゆみ』日本放送協会出版.


（主任指導教員　山田浩之）